大学生の放課後の生活空間

大学生用放課後生活空間評価尺度作成に向けて

○蓮見元子¹・北原靖子¹・川嶋健太郎²・佐藤哲康¹・生駒忍¹
(¹川村学園女子大学・²尚絅大学短期大学部)

キーワード：放課後の生活・大学生・青年期の発達課題

After School Life of University Students

Motoko HASUMI¹, Yasuko KITAHARA¹, Kentaro KAWASHIMA², Tetsuyasu SATO and Shinobu IKOMA¹

(¹Kawamura-gakuen Woman's Univ., ²Junior Department of Shokei Univ.)

Key Words: After School Life, University Students, Developmental Task,

問題と目的

子どもたちの放課後の生活実態に対する危機感から我々はこれまで小学生の放課後の過ごし方を中心に、多角的側面より教育心理学的研究を行ってきた。放課後や長期休暇をどのように過ごすかが、その後の子どもの発達や学習に大きな影響を及ぼすからである。

今日、大学生の学力低下が指摘され、リメディアル教育なるものが叫ばれるようになった。Havighust (1953)によれば、青年期の発達課題は、洗練された男女の交際を学び、両親から情緒的に独立すると同時に、将来に備えて、高度で専門的な勉学に傾倒するべき時期である。しかしながら、蓮見・他 (2012) は、勉学に勤しまずにアルバイトなどに多くの時間を費やし、無為に時間を使っている高校生・大学生の生活実態を明らかにした。本研究の目的は、さらに踏み込んで大学生の放課後の生活空間の実態を明らかにするとともに、大学生の放課後生活空間を評価する尺度の作成を試みることである。

方 法

研究対象、A 大学、B 大学の学生 120 名 (男 41 名 女 79 名)。学年は 1 年生が 73 名、2 年生が 42 名、3 年生が 4 名、不明 1 名。A 大学は女子学生のみ。B 大学はほとんどが男子学生。

材料 大学生用の放課後の生活に関する調査用紙を作成した。質問項目は大学生活、放課後の課外活動、生活空間、アルバイト、ボランティア経験などについて尋ねるものであった。記述式のものと各質問項目に対する当てはまり度を 4 件法で回答するものとで構成されていた。

手続き 教室内で質問紙を配布し、回収された。

結 果

表 1 には、放課後の過ごし方について、記述式で行われた回答のおもな結果を示した。

表 1 大学生の放課後の生活 N=120 () は回答者数

通学日数は？	4 日 (6) 5 日 (108) 6 日 (2)
部活動はしていますか？	はい (48) いいえ (72)
部活動の日数は週に何日？	1 日 (22) 2 日 (12) 5 日 (4)
アルバイトはしていますか？	はい (69) いいえ (51)
アルバイトの種類は？	飲食店 (29) 居酒屋 (5) スーパー・コンビニ (8) 家庭教師・塾 (6)
アルバイトの日数は？	2 日 (15) 3 日 (22) 4 日 (17) 5 日 (10)
アルバイト収入は？	2 万円 (6) 3 万円 (10) 4 万円 (11) 5 万円 (11) 6 万円 (5) 7 万円 (6)
理想的な放課後の過ごし方は？	程よくバイトをして程よく遊びたい いえでごろごろしたい 図書館で勉強したい 買い物に行ったり、ご飯を食べに行く 友だちと遊びに行く サークルではじけたい など

次に大学生用放課後生活空間評価尺度作成の試みとして、33 の質問項目を用意し、「当てはまる」を 4、「やや当てはまる」を 3、「あまり当てはまらない」を 2、「当てはまらない」を 1 として、項目分析を行った。回答の偏りがなかったため、33 項目すべてで因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った。固有値 1 基準で因子を抽出し、さらに因子負荷量 .40 以上の基準で、どの因子にも負荷しない項目の削除を繰り返し、最終的には 27 項目が残り、7 因子が抽出された。第 1 因子は「資格をとるために勉強する」、「大学の勉強の予習、復習をする」などで「自己研鑽」と命名した。第 2 因子は「家族と過ごす」「家の手伝いをする」などで「家族」、第 3 因子は「外に出て運動する」「大学のサークル、クラブ活動、学生委員会などをする」などで「大学生活」、第 4 因子は「パソコンを使う」「アルバイトをする」などで「個人的活動」、第 5 因子は「友人恋人など親しい人と過ごす」「たくさんの人と一緒に過ごす」で「社交性」、第 6 因子は「室内より外で過ごしたい」などで「戸外活動」、第 7 因子は「自分ひとりきりで過ごす」などで「一人ぼっち」とそれぞれ命名した。因子ごとに A 大学と B 大学の比較をしたところ、表 2 に示す結果となった。

表 2 7つの因子 (下位尺度) の平均得点の比較

	A 大学	B 大学	差異
自己研鑽	1.79	1.83	
家族	2.47	1.75	A>B **
大学生活	1.63	1.97	A<B *
個人的活動	2.43	3.15	A<B **
社交性	2.66	2.67	
戸外活動	2.36	2.20	
一人ぼっち	2.86	3.05	

A 大学生、B 大学生共に「自己研鑽」「大学生活」は 1.63～1.97 と低く、「一人ぼっち」は 2.86～3.05 と高かった。

考 察

多くの学生がアルバイトをしており、収入を得ていた。大学でのクラブやサークル活動の日数はそれほど多くなかった。すなわち、A 大学生、B 大学生ともに、放課後、専門の勉強等に勤しむ自己研鑽活動やサークル・委員会活動を行うより、個人的活動 (アルバイト、一人・友だち・親と過ごす) を行うことが多いようであった。今後は大学生が自身の放課後生活を評価できるような尺度の作成を目指すこととする。

引用文献

蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2012)
「高校生および大学生の放課後の生活について—小学生の放課後の生活と比較して—」日本心理学会第 76 回発表論文集